

上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

1990年度

上市町教育委員会

1991年3月

序

靈峰劍の麓に広がる上市町は、古くから人々の生活の場として、数多くの文化遺産を育みそだててきた所です。今から約2万5千年前の眼目新丸山遺跡、縄文時代の極楽寺遺跡、弥生時代の江上遺跡などがその歴史を如実に物語っています。祖先が苦難に耐えて、人生を開拓し、懸命に生きてきた中に、激変する今日にも通用し、来たるべき21世紀にも価値を持つに違いない業績と「生き方の哲学」を学ぶことができるのです。

ところが、近年、押し寄せる開発の波の中でこれらの貴重な文化遺産が失われようとしています。

町ではこの事態を重視し、次代を背負う人々にもこのすばらしい恩恵が受けられるよう文化遺産を継承することが、今に生きるもの責務であるとの考え方から、そのための基礎資料を充実することにいたしました。本書がより多くの方に利用され文化財保護の一助となることを願ってやみません。

最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、御協力いただいた地元の方々、また御援助をいただいた富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、富山大学人文学部考古学研究室をはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

上市町教育委員会

例　　言

1. 本書は、上市町教育委員会が国庫補助事業として実施した遺跡詳細分布調査の3年次目（1990年度）の報告書である。
2. 調査は、富山県埋蔵文化センター、富山大学考古学研究室の指導と協力を得て上市町教育委員会が実施した。
3. 調査事務・現地調査は、生涯学習課主任高慶孝が担当し、生涯学習課長荒川武夫が統括した。
4. 遺物の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行った。
5. 調査参加者は次のとおり。（現地調査補助員）越前慶祐・亀井聰・高橋浩二・葛山拓也・野村祐一・榎本和代・向山静子・谷杉延子・河合君近・渡部克昌・宮沢京子・浜木さおり・片岡英子・鈴木和子・森田知香子（遺物整理）久保久美子・大井邦子
6. 本書の作成にあたっては、富山県埋蔵文化財センターをはじめ、富山大学人文学部助教授宇野隆夫・同講師前川要の両氏、財団法人富山文化協会埋蔵文化財係榎本正春氏、立山町教育委員会社会教育課主事森秀典氏をはじめとする方々から多大の御協力と貴重な御教示を受けた。深く感謝して御礼申し上げる次第である。

目 次

第1章 はじめに

1 調査の目的.....	1
2 調査の経過.....	1
3 上市町の地勢と自然.....	2

第2章 分布調査の成果..... 3

1 遺跡と採集遺物	3
(1) 広野新遺跡.....	3
(2) 柿沢新遺跡.....	3
(3) 鄉柿沢館跡.....	4
(4) 三杉遺跡.....	4
(5) 広野A遺跡.....	5
(6) 広野B遺跡.....	5
(7) 齊神新古墳群.....	5
(8) 田島野遺跡.....	5
(9) 稗田善界遺跡.....	6
(10) 稗田大門添遺跡.....	7
(11) 湯神子B遺跡.....	9
(12) 湯神子C遺跡.....	9
(13) 湯神子A遺跡.....	9
(14) 堤谷村上遺跡.....	9
(15) その他.....	9
参考文献.....	10

挿 図 第1図 地域区分図	2
---------------------	---

図版目次

- 図版1 調査地区現況写真 (1)
- 図版2 遺物実測図 (1) 繩文土器・石器、須恵器、土師器、陶磁器
- 図版3 " (2) 繩文土器・石器、須恵器、土師器、陶磁器
- 図版4 " (3) 土師器、須恵器、珠洲、陶磁器
- 図版5 " (4) 繩文石器、須恵器、珠洲、陶磁器
- 図版6 " (5) 須恵器
- 図版7 " (6) 須恵器
- 図版8 " (7) 土師器、須恵器
- 図版9 " (8) 繩文土器、土師器、須恵器
- 図版10 遺物写真 (1) 繩文土器・石器、須恵器、土師器、陶磁器
- 図版11 " (2) 繩文土器・石器、須恵器、土師器、陶磁器
- 図版12 " (3) 土師器、須恵器、珠洲、陶磁器
- 図版13 " (4) 繩文石器、須恵器、珠洲、陶磁器
- 図版14 " (5) 須恵器
- 図版15 " (6)(7) 須恵器
- 図版16 " (8) 繩文土器、土師器、須恵器
- 図版17 遺跡分布図

第1章 はじめに

1 調査の目的

上市町に人々の営みが確認できる最も古い時期は、今から約2万5千年前であり、それは上市川左岸の河岸段丘、^{おとせんとう}眼目新丸山遺跡においてである。以後、旧石器（先土器）・縄文時代は、この上市川左右両岸の段丘上、弥生時代は、上市川、白岩川をはじめとする河川により形成された扇状地、古墳時代以降は町の平野部全域というように、時代により生活の場の中心は変化する。しかしながら、現在に至るまで連続として人々の生活が続いている。

したがって遺跡の数も多く、1972年（昭和47年）の『富山県遺跡地図』においては41箇所の遺跡が登録されている。そして、弥生時代の江上遺跡に代表されるように、その後、新たに発見された遺跡も多く、未発見、未登録の遺跡も少なからず存在するものと考えられる。

ところが、近年の開発行為の増加に伴ない、遺跡の保護と開発との調整が社会問題化してきており、こうした中で、人知れぬうちに消滅した遺跡もあった可能性がある。

このような中にあって、上市町教育委員会は、郷土の歴史と文化を守り育てるため、また保護と開発との調整のための基礎資料として、遺跡台帳、遺跡地図の整備充実が急務であると考えたのである。

2 調査の経過

以上から、上市町教育委員会では、国庫補助金、並びに県費補助金を得て遺跡詳細分布調査を行うこととした。今回の調査はその3年次目に当たる。

調査対象は、山岳地帯と一部山地を除く全町域をI～V地区に区分し、5箇年を目途に遺跡の所在確認及び遺物の採集を行うこととした。

今回の調査地区は、上市川右岸の広野を中心とした台地上と、左岸の湯崎野、稗田を中心とした河岸段丘上で、大岩川の以北に続く部分である（第1図III）。これらの地区は、道路建設、住宅化などが目ざましい地区であり、遺跡の保護上、早急に遺跡の有無、規模、性格を把握する必要性があった。調査の実施にあたっては、便宜上、上市川右岸から郷川左岸に続く台地上と、上市川左岸から大岩川右岸に続く丘陵との2地区に区分し、さらに各地区を村落や水田区画、用水等により、数箇所の小地域に分けて、対象地域の日安とした。ただ、河川や、人口の集中する市街地等は調査が困難であったため、一部調査は、将来に委ねた。調査地区の面積は、約200haである。

調査に持参する地図は5千分の1の国土基本図とし、遺物密度の高い場所以外では、原則として1点ごとに地点を記入した。

調査期間は、1990年11月8日から同年11月29日の計8日間、延81人の参加を得て実施した。遺物の整理、実測、写真撮影、報告書の作成は、1991年1月から3月にかけて行った。

調査にあたっては、富山大学考古学研究室の協力を得、現地調査の補助員として多くの方々に参加いただいた。記して謝意としたい。

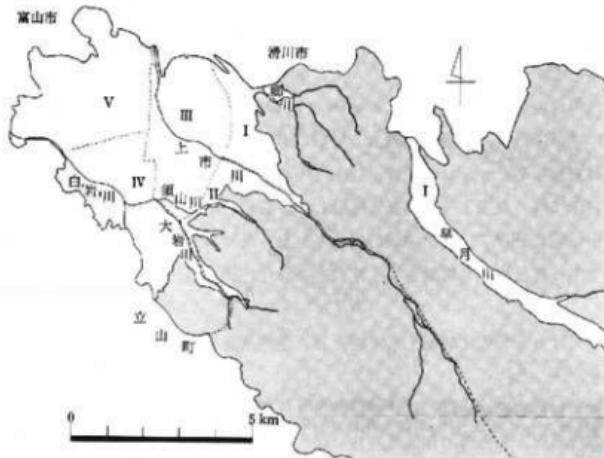
3 上市町の地勢と自然

上市町は、富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する早月川、上市川、白岩川にそって東南から北西に細長く延びる町である。西は県の中心である富山市に、東は標高2998mの鶴岳をはじめとする北アルプスの山々が連なる。町域は東西約26kmで、南北約16kmで、面積は約237km²を測る。

地形は実に変化に富んでいる。東部は山岳地帯で、そこをぬうように早月川が流れしており、流域に独特の自然景観をあたえている。西部は、上市川、白岩川によって形成された扇状地が広がり、緑の田園地帯を形づくっている。富山湾岸までの距離は約10kmである。扇状地の扇側部付近は、隆起によってできた河岸段丘が、東西に延びており、山地との境にまで続く。こうした地形の背後に丘陵があり、鶴岳をはじめとする山岳地帯へと続く。これが北アルプス立山連峰で、氷河地形の圓谷（カール）や、火山地形が隨所に見られる。町の最高地点、鶴岳と、最低位の上市川の扇端部までは約26kmで、比高差約2950mである。

このように、上市町は、東西の比高差が非常に大きいため、照葉樹林、落葉樹林、針葉樹林、低木林というように、多様な植物分布を示し、それに伴う複雑な動物相も存在している。

今回の調査は、上市川右岸から郷川左岸に続く台地上、及び上市川左岸から大岩川につづく段丘上である。これらの地域での遺跡の発見例は少ないが、広く遺物の分布が知られている地域である。



第1図 地域区分図（IIIが1990年度）

第2章 分布調査の成果

1990年度調査によって整理箱3箱分の資料を採集した。遺物総数は、746片で、約40個体余りの土器・石器等を採集した。以下遺跡ごとに説明を行う。

1 遺跡と採集遺物（図版1～17）

(1) 広野新遺跡（図版17の1）上市町広野新

遺跡は、広野新集落の北西約100mの水田で、遺跡の北側を流れる郷川の河岸段丘で、東から西へなだらかに傾斜する地域である。標高は約25m測る。

付近一帯は、水田及び畠地である。北側は県の史跡である本江遺跡（昭和47年2月26日指定）がある。本遺跡の広がりは非常に広く、遺跡名は2つがあるが、一般には、本江・広野新遺跡と呼ばれている。現在は、ほ場整備が終了しており（昭和46年）、遺跡の散布が認められるのみであるが、その状態からみてかなりの部分で遺跡は残存しているものと思われる。

採集遺物は、縄文土器41片、土師器5片、陶磁器6片であった（図版2の1～38）。

縄文土器はいずれも小片であるが、文様は比較的明確で、おおむね縄文時代後・晩期のものと考えられる（1・2・5・23・25・32・34～38）。

1・11は、沈線を持つ土器である。このうち11は、縄文を施した後、竹状の工具で沈線を施している。2・3・6・8・15・38は無文の土器片であるが、一部すり消された痕跡を残している。5・7・10・12～14・16～35・37はいずれも縄文が施されている。このうち5・7・10・14・16～35は、いずれもLRの縄文が、8・9・13・37はRLの縄文がそれぞれ施されている。15・36は磨滅が激しいが、隆起線文が施されている。器形は、主として深鉢と考えられるものが多いが、5・6・11は、浅鉢である可能性が高い。

3・4・24・33はいずれも土師質の土器である。4は壺の口縁部で内面が若干、内湾している。他の破片は、磨滅が著しく時期の判断や器形判定はできなかった。

広野新遺跡の周辺には、本調査の初年に発見されたが砂林開北遺跡（弥生時代末）にも隣接しており、縄文時代から弥生時代・古墳時代にまたがる多くの資料が採集される地域であり、今後十分な調査が必要である。

(2) 柿沢新遺跡（図版17の2）上市町柿沢新

遺跡は、郷川と上市川の合流点から南東約800m、県道魚津・立山線の郷川橋から南へ約150mの水田に位置する。標高は約17mで、附近一帯は比較的底湿な水田地帯である。遺物は縄文土器7片、石器2片を採集した（図版3の1～6）。

縄文土器は細片が多いが、残りのよい4片について図示した（1～4）。

1～3は縄文が施されているが、一部スリ消した部分が観察される。4は、深鉢の口縁部である。施文は、縄文を施した後、口縁をスリ消し、ヘラ状工具により縦の沈線を施す。その上部は縄文の細長い文様帯を残すもので、縄文時代後期の土器と考えられる。

石器は2片を採集した。いずれも、水田耕作中の柿沢新在住、吉井隆雄氏より譲り受けたものである。(5、6)。

5は、磨製石斧の未製品である。一部研磨痕が見られるが、上部が欠損した時点で、タタキ石とし転用したものと見られる。石質は蛇紋岩で、残存部分の全長6.5cm幅5.8cm、重量188gである。6は、短冊型の磨製石斧である。一部に欠損部があるものの比較的残りのよいものである。刃部に一部欠損部分と、表裏両面に対称に残る使用痕とみられる部分が観察できる。全長12.5cm、幅5.2cm、重量246gで、石質は蛇紋岩が使用されている。

(3)郷柿沢館跡(図版17の3)上市町郷柿沢(西養寺)

館跡は郷柿沢地区の北端で、柿沢新遺跡の南約500mの県道沿に位置する。周辺は、寺院並びに墓地と水田、畠地である。標高は約27mである。

この館跡は古くから知られており、昭和34年3月12日に史跡として町の指定文化財となっている。西養寺がその中心部分で、東西73m南北80mにわたって周囲に幅2mから7mの濠がめぐり、その内側に高さ2m、幅3m前後の土塁がめぐらされている。この館は、中世末に中新川一帯を領した土肥氏の城館で、天正年間、土肥美作守政繁が、佐々成政に敗れて後、土肥弥三郎が、農業を営み、その後、一向宗徒の乱である石山合戦に参戦した椎名兵部が西養寺を開基、土塁、濠をそのまま利用して現在の寺院がかまえられたものようである。また、この館跡は、滑川市の有金城・堀江城・稻村城・千石山城との支城関係が考えられている(高岡1982)。

遺物は、土師質上器9片、珠洲3片、陶磁器3片を採集した(図版2の57・58・65、図版3の32~40、図版4の8~13)。

図版1の57・図版3の32~40は、いずれも土師質の土器である。このうち34は壺の口縁部で、他は皿である。土師質の皿は3種に識別できる。1のタイプは底部が丸く口縁部との境がスムーズにつながる図版3の38・39、2のタイプは口縁部が外反ぎみに開く図版1の57・図版3の32・33・35、3のタイプは平坦な底部に短かく立ち上がる口縁部が付くもので、図版3の36・37・40がそれである。1・2のタイプは16世紀代と考えられるが、3のタイプは、やや古くなると考えられる。図版1の62、図版4の8・10・11は珠洲である。図版4の8はやや厚手の蓋である。10・11は壺の胴部である。図版4の9は越中瀬戸の碗で、内外面に黒色釉が施されている。底部はケズリ出し高台で、中央部が肥厚している。図版1の58・65、図版4の12・13は染付で、1の58・4の12は皿、1の65・4の13は碗である。このうち4の13はコンニャク版で施文されている。

(4)三杉遺跡(図版17の4)上市町三杉町

遺跡は上市川の右岸で三杉町の西約250mの水田中に位置する。標高は約31mで遺跡の西側の水田との比高差が約2mで、やや高まりを持った地域である。周辺は、ほ場整備が完了しており全体としてあまり残りのよい遺跡とはいえない。しかしながら、前述の柿沢新遺跡と同様、標高の低い地域での縄文時代遺跡の発見例は少なく、今後の課題となるものと考える。

遺物は縄文土器3片、磨製石斧1片である。縄文土器はいずれも磨滅がはげしく細片であるため時期の判断や器形判定はできない。ここでは石器を図示した(図版5の1)。

1は平面形が撥型の磨製石斧である。欠損しており刃部は残っていない。石質は青灰色の砂岩である。全長は残存部で約10cm、幅5.2cm、重量178gである。

(5) 広野A遺跡(図版17の5) 上市町広野

遺跡は広域農道(スーパー農道)沿いの標高約58m、県道五位尾・上中町線との交叉点から南へ150mに位置する。周辺は、水田・畑である。

遺物はいずれも縄文土器で9片を採集したが、細片が多い。ここでは4片を図示した(図版2の42~44・47)。

42・47はLR、44はLRの縄文が施されている。43は半截竹管文と沈線が見られる。おおむね中期の土器と考えられる。遺跡周辺は、道路整備・ほ場整備等が終了しており、遺跡そのものとしての残存状況はよくない。

(6) 広野B遺跡(図版17の6) 上市町広野

遺跡は野鳥集落の北西約600m、南加住積小学校の南東約600mの水田に位置する。付近では、農道拡幅工事が行われているが、遺跡は破壊をまぬがれており、比較的良好な資料が採集できた。遺物は、縄文土器10片、石鏽1片を採集したが、そのうち6片を図示した(図版2の39~41・45・46・48)。

39はLRの縄文が施された深鉢の口縁部である。40は隆線による施文が行われている。中期の土器と考えられる。41は、半截竹管の裏面を押圧した施文が見られる。45は深鉢の脛部のくびれ部分で半截竹管による刺突が観察できる。46は半隆起線文が見られる。後期の土器と考えられる。

48は石鏽である。無茎のもので、全体に細身である。剝離は非常に細かく、繊細な作りのものである。全長2.1cmで、石質は輝石安山岩である。

(7) 齊神新古墳群(図版17の7) 神市町齊神新

古墳は上市川の右岸の標高約58m、県立上市高校の東300mの神明神社背後の竹林内に所在する。

古墳は明確な墳丘を残すもの5基がある。昭和33年頃、地元の発掘調査で半壇になったもの2基があったという。規模は、墳丘の高さ1~1.5m、直径3~10mである。発掘された古墳は、この古墳群中最も大きなもので、墳丘の直径が16m、高さ1.6mと記録されている。石室は地山を掘り込んで作られ、長さ約7m、幅1.1m、深さ1mの狭長な横穴式石室であったという。無袖で、副葬品は検出されなかった。墳丘からは、奈良時代の須恵器蓋、杯身一対が出土している。

古墳は終末期のもので7世紀代の築成と推されることから、この須恵器は、後の時代に、供獻されたものようである。

古墳群は全体として、ほとんど手がつけるぬまま残っている5基の他は、石室材とみられる石の表出によってのみ知られる。

(8) 田島野遺跡(図版17の8) 上市町田島野

遺跡は、上市川の右岸の段丘上で、田島野集落の北東約350m、齊神新古墳群の東側に隣接して所在する。標高は約65mである。

周辺は畠地と竹林であるが、中心部は牧場と考えられ、精査できなかった。

遺物は土地所有者の池田喜代治氏より提供された石器3個を図示した（図版3の7～9）。

7は敲打器である。先端部に敲打痕が見られる。全長約16cm、重量470gで、石質は、硬質の泥岩である。8は撥型の打製石斧である。先端部分に欠損が見られるが、よく形状を残している。中央のくびれ部分は交互剝離によって作られている。全長約16cm、狭幅約6cm、広端幅約10cm、重量357gで、石質は、安山岩である。9は、横型の石ヒである。刃部に若干の調整が加えられている。全長11cm、広端幅約9cm、重量241gで、石質は泥岩である。

(9) 梶田善界遺跡（図版17の9）上市町桝田善界

遺跡は、上市町役場のある法音寺の南、上市中学校の西側に隣接して所在する。遺跡は、上市中学校から東へ、県道大岩・神明町線に至る地域に細長く広がっているものと考えられ、東西約300m、南北約150mの広い地域が遺跡地内と考えられる。付近一帯は、水田・畠地・宅地などである。標高は最高位の地点で約45m、最低地の地点で約40mである。この一帯では、奈良時代から中・近世までの遺物が広く採集される。法音寺という地名が近くにあるが、小字名では、善界、熊野、寺源田、植物田などがあり、古代から中世にかけて寺社等の存在をうかがわせている。

遺物は、縄文土器3片、土師器10点、須恵器32点、珠洲2点、陶磁器26点を採集した（図版9の21～57・59～61）。

縄文土器は3片を図示した（38～40）。3片ともかなり磨滅が激しい。38・40は、RLの縄文が施されている。39は口縁部で沈線が施されている。

土師器は3片を図示した（53～55）。53・54は皿で、底面から口縁部がスムーズに立ち上がるタイプのものである。55は壺の口縁部で、口唇部が肥厚して外反するものである。いずれも16世紀代のものと考えられる。

須恵器は18片を図示した（22～24・30・31・34～37・41～43・46～48・51・52・56）。

22～24・30・31・34～37・41～43・52は、内外面に押圧痕、打圧痕を残す破片である。このうち、36は横瓶、43が長頸瓶である。外面は平行叩きで、内面押圧具は同心円状を呈する。全体として9世紀中頃以降のものと考えられる。

46は、短頸壺の蓋である。やや肩のはった形状で、前述の破片群よりやや古いものと考えられる。

47・56は杯蓋である。47はやや大ぶりのもので、宝珠は偏平である。9世紀中頃のものと考えられる。56は小型の蓋で、端部は丸くおさまる。

48・51は杯身である。48は高台がほぼ直立するものである。51は、口縁部がスムーズに立ち上がるタイプのものである。

珠洲は2点を図示した（45・57）。45は、壺の底部である。焼成がわるく胎土は赤褐色を呈する。底面に回転糸切痕を残す。57は擂鉢である。口唇部が面取りされており、口縁内部に沈線がめぐる。ハケ目は、一単位が11本からなり、やや粗い。

陶磁器は、14片を図示した（21・25～27・29・32・33・44・49・50・58～61）。

21・60は外面が乳白色を呈する小型の壺である。いずれも口縁部が直立して立ち上がる。

25・26・33・49・50・58～61はいずれも越中瀬戸である。このうち25・26・49・50・58・59は小型の皿である。25・49・59はケズリ出し高台である。26・50・58は口縁部で、26・50は灰釉が、58は鉄釉が施されている。33は灰釉が施された花瓶で、底面に糸切痕を残す。61は碗で、内面全体に黒色の釉が施されており、外面はその釉を網の目状に施した文様が描かれている。

27・32は染付の碗である。このうち32は外面に梅の文様が施され、内面に蛇の目が見える。

(例) 榛田大門添遺跡 (図版17の10) 上市町榛田大門添

遺跡は上市中学校南東に隣接して所在する。善界遺跡の南側で、若干、遺物の採取できない地域をへだてて隣接する。標高は約40mで付近一帯は、畑地・水田である。ここでは、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く採集できた。善界遺跡とは異なり一定地域に集中して多量の遺物が採集できる地域である。小字名は、大門添、茶園などである。

遺物は、縄文土器1片、土師器66片、須恵器98点、珠洲2片、陶磁器65点を採集した(図版6、図版7、図版8、図版9の1～20)。以下図版ごとに記述する。

図版6はすべて須恵器である。内外面に押圧痕、打圧痕が残るものには、1～13・15～22・24～29・31・32がある。これらを大別すると、打圧原体が平行叩き目である1～15・17～22・24・25・27～29・32と、長方形格子叩き目が施される16・26・31とに分けられる。また押圧原体も、通有の同心円状のものである4・5・15・12・19・28・32の他、1単位が完全な弧状をなさない10・18・21・22・24・25～27・31、スダレ状の20・26、ハケナデ調整が行われている14・16・23などの種類がある。これらは、その断面の厚さなどから見て、器形や法量により使いわけられているようである。

器形の推定できるものには、30・32～35がある。30・32～34はいずれも壺である。

底部が平面形で、底面からの立ち上がりが丸いものである。このうち、33・34は底部の一部が削られ、底面端部で接地する。35は長頸瓶の底部である。高台が外反し、底部の形状がくの字形を呈する。9世紀末から10世紀に比定できるものと考えられる。

図版7は、主に壺・壺類を図示した。

1・2は、大型の壺である。おそらく同タイプのものと考えられる。1は口唇部である。外反し、肥厚する。2は頸部である。S字状の断面形を有する。

3・4・6・7は壺類である。いわれる長頸瓶と呼ばれるタイプのものである。3は端部が肥厚ぎみにおさまるものである。4・6は口縁部が外反するものである。7は、口縁部が外反し口唇部がやや弱く屈曲するタイプである。口縁内側に腹がめぐる。

5・9・12～14は、壺類である。5・9は口唇部は外反するタイプである。12は小型の壺で、頸部がくの字状に屈曲する。口唇部は丸くおさまる。13・14は、破片から口縁部が長立するタイプと考えられ、いわゆる短頸壺と考えられる。

8は、平鉢と考えられる。口唇部上面がフラットで、肥厚する。

10・11・15～18は、壺・壺類の胴部である。このうち10は、耳を持つもので、その痕跡が見ら

れる。11・15・16は、肩のなだらかな壺である。17・18はやや小型で、肩のはった形の壺ではないかと考えられる。

19～27は、内外面に押圧痕・打圧痕を残す破片である。叩き目は平行叩きが主であるが、27に見られるような搔目調整が行われるものがある。また、20・21・23はハケ目調整が行われている。28は珠洲の擂鉢である。

図版8は、土師器と、須恵器の杯類を図示した。

土師器は、18片を図示した（2～19）。このうち2～5は皿である。2・3は底面が丸く口縁部にスムーズな立ち上がりを見せるタイプである。4は口唇部が内湾し、肥厚する。5は底部が平らで、全体に厚手である。

6～10は小型の壺である。6は口唇部が外反し、やや肥厚する。7～9は口唇部を面取りして作られており、外面をナデ調整している。10は、口縁部がやや間伸びするもので、小型の長壺である。

11は、鉢である。口唇部が平らで外反ぎみに肥厚する。

12・13は、高杯の杯部である。12は内面に沈線が施され、ややくびれて口縁が立ち上がる。13は、口唇部が立ち上がり、外反するものである。

14～19は、壺類の破片である。14は外面にハケ目、内面には同心円状の押圧痕が観察できるが、消去している。15～18は内外面にハケナデ調整が行われている。19は外面に平行叩きを施した後、搔目調整が行われている。

須恵器は26片を図示した（1・20～44）。

1・20～29は、杯蓋類である。1・20～23は平笠形を呈する。このうち、1・23は端部が巻き込み気味に内屈するものである。24・25・27・28は、端部が直立ぎみに立つもので、頂部が平らな蓋である。知頬壺の蓋であると考える。26・29は、頂部が平坦で、おそらくつまみ（宝珠）が付くものと考えられる。端部は尖がり気味にやや外反する。

30～44は、杯身・碗類である。30・35・38・39・41・42は端部が丸くおさまるものである。このうち38は平底で、ヘラ削りが見られる。39・42は、端部がやや内湾ぎみに立ちあがり、薄手の作りである。

34は、端部が内湾してくびれるものである。

31～33・35～37・40・43・44は、有台杯である。32・33は体部との境が丸味をおび、内屈する高台が貼り付けられるものである。36・37・30は高台が底く、体部が底面からあまりはり出さず立ち上がるものである。43・44は体部が鋭角的に立ち上がる。43は高台が底く丸いのに対し、44は高台が外反して立ち上がる。

図版9の1～20には、陶磁器を図示した。

1～6・8は越中瀬戸の擂鉢である。1・2・4は口唇部が窪み、肥厚する。3は、口唇部が肥厚するものである。5・6・8は撗目が施された破片で、茶色釉が施されている。

7は珠洲である。10・11～14は陶器の皿である。このうち、10～12・14は越中瀬戸の皿である。

10・11はケズリ出し高台で、10は見込みに菊花紋が見える。9は越中瀬戸の蓋で、内外面とも灰釉が施されている。17は越中瀬戸の碗である。内外面に黒釉が施されている。

15は、瀬戸・美濃系の陶器である。薄手で口縁が外反する。内外面とも乳白色の釉が施されている。

16・19・20は、染付の碗である。19は外面に杉状の文様が、20は内面に梅が描かれている。

⑩ 湯神子B遺跡（図版17の11）上市町湯神子

遺跡は須山川の右岸の段丘上で、上市町役場から南東へ約1kmの湯神子、神明神社周辺に位置する。標高は約50mで、付近は神社境内、畠地、水田である。

この地域は、1989年に、ほ場整備が行われており、事前の試掘調査で、神社境内地を中心に周濠が発見されている。遺物は少量の土師質土器を出土したのみであるが、ほ場整備の対象外として遺跡は保存されている。

⑪ 湯神子C遺跡（図版17の12）上市町湯神子

遺跡は、須山川の右岸段丘上で、上市中学校から南東へ約800mの位置に所在する。標高は45mで、直下を流れる須山川との比高差は約5mを測る。遺物は細片で、磨滅が激しく器種の判断時期の判定の資料を欠くが、縄文土器を採集している。

⑫ 湯神子A遺跡（図版17の13）上市町湯神子焼田

遺跡は、須山川の右岸段丘上で、上市中学校から南東へ約1.4kmの位置に所在する。標高は約52mで、直下を流れる須山川との比高差は約8mである。付近は、畠地、水田である。この遺跡は1989年に、ほ場整備に伴う分布調査で確認されており、1990年秋の試掘調査でも確認されている。縄文時代中期の遺跡であるが、詳細は、1991年のほ場整備に先立つ調査で明らかにしたい。

⑬ 堤谷村上遺跡（図版17の14）上市町堤谷村上

遺跡は、須山川右岸の堤谷地内、標高約61mで、付近は水田、畠である。縄文時代中期の遺跡で、1989年度の分布調査で先に確認されているが、今調査で、スーパー農道にまたがって広がっていることが確認された。

⑭ その他

今調査で、遺跡として設定した地区以外でも多くの遺物を採集した（図版2の49～56・59～61・64～85、図版3の10～31、図版4の1～7・14～61、図版5の2～40）。これらの遺物は、中世末から、近世にかけての遺物が多く、その分布も、上市川右岸地域（図版17、イー1～イー7）の全域でぼくまなく採集できる。これは、広野、広市、野開発、柿沢新といった中世から近世に成立したと考えられる集落に関連した遺物と思われる。これに対して、上市川左岸の旧上市川流路が想定される部分においては、遺物が、ほとんど採集されず、稗田善界遺跡以北の上市川左岸が、上市川の氾濫原であったと考えられる。

また、稗田善界遺跡・稗田大門添遺跡は、ほぼ同一時期の遺跡と考えられ、採集できる遺物も8世紀末から9世紀に集中する。付近一帯の字名などからも、上市が成立する以前の本地域での中心的施設（法音寺などの寺院、郡衙など）があった考収が強い。これらの遺物は、中新川地域

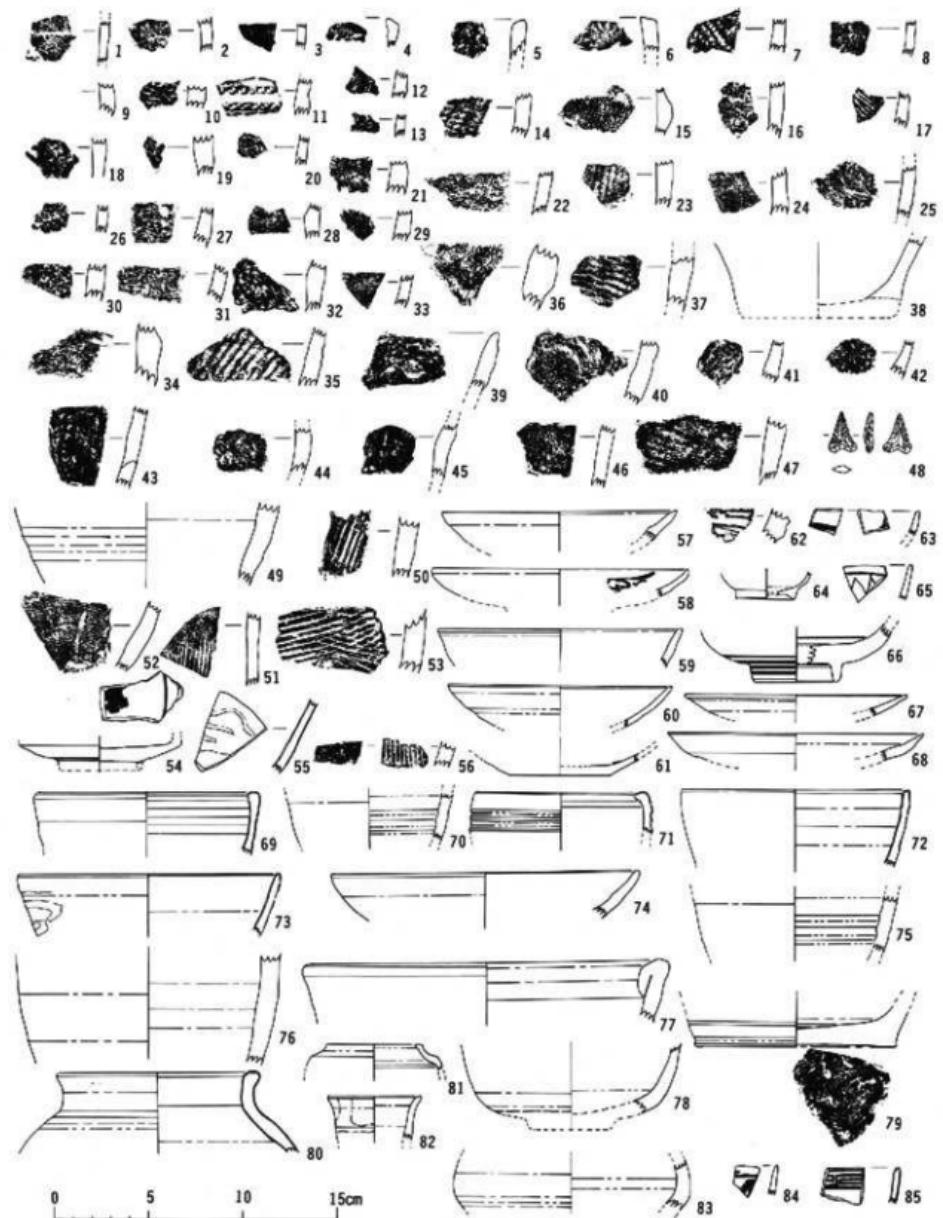
の中で、立山町上木古窯跡からの製品である可能性が非常に高い。

参考文献

- 1 上市町『上市町誌』1970年。
- 2 上市町教育委員会『弓庄城跡第5次緊急発掘調査概要』1985年。
- 3 上市町教育委員会『永代遺跡緊急発掘調査概要』1985年。
- 4 上市町教育委員会『上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ』1990年。
- 5 上市町教育委員会『上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ』1991年。
- 6 小島俊彰『北陸の繩文時代中期の編年—戰後研究史と現状』『大綱』第5号、1974年。
- 7 高岡徹『富山県』『日本城郭体系』7新人物往来社、1980年。
- 8 高岡徹「富山県上市町柿沢城と国人土肥氏の城館配置」『かんとりい』No.6、越中の歴史と文化を考える会、1982年。
- 9 立山町教育委員会『立山町史』上巻、1977年。
- 10 立山町教育委員会『白岩鞍ノ上遺跡・吉峰遺跡』富山県立山町埋蔵文化財緊急発掘調査概要、1981年。
- 11 立山町教育委員会『立山町埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ』1987年。
- 12 富山大学考古学研究室『越中上木窯』考古学研究報告第3冊1989年。
- 13 富山県『富山県史』考古編、1972年。
- 14 富山県教育委員会『富山県遺跡地図』1972年。
- 15 富山市教育委員会『長岡杉林遺跡』1987年。
- 16 藤田富士夫『富山』、日本の古代遺跡13、保育社、1983年。
- 17 藤田富士夫『珠状耳飾』、繩文文化の研究7、雄山閣、1983年。
- 18 森秀雄『大昔の富山県』1950年。
- 19 吉岡康暢『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会、石川考古学研究会1983年。
- 20 吉岡康暢『加賀・珠洲』世界陶磁全集3、日本中世、1977年。
- 21 滑川市『滑川市史』滑川市史編さん委員会1979年。

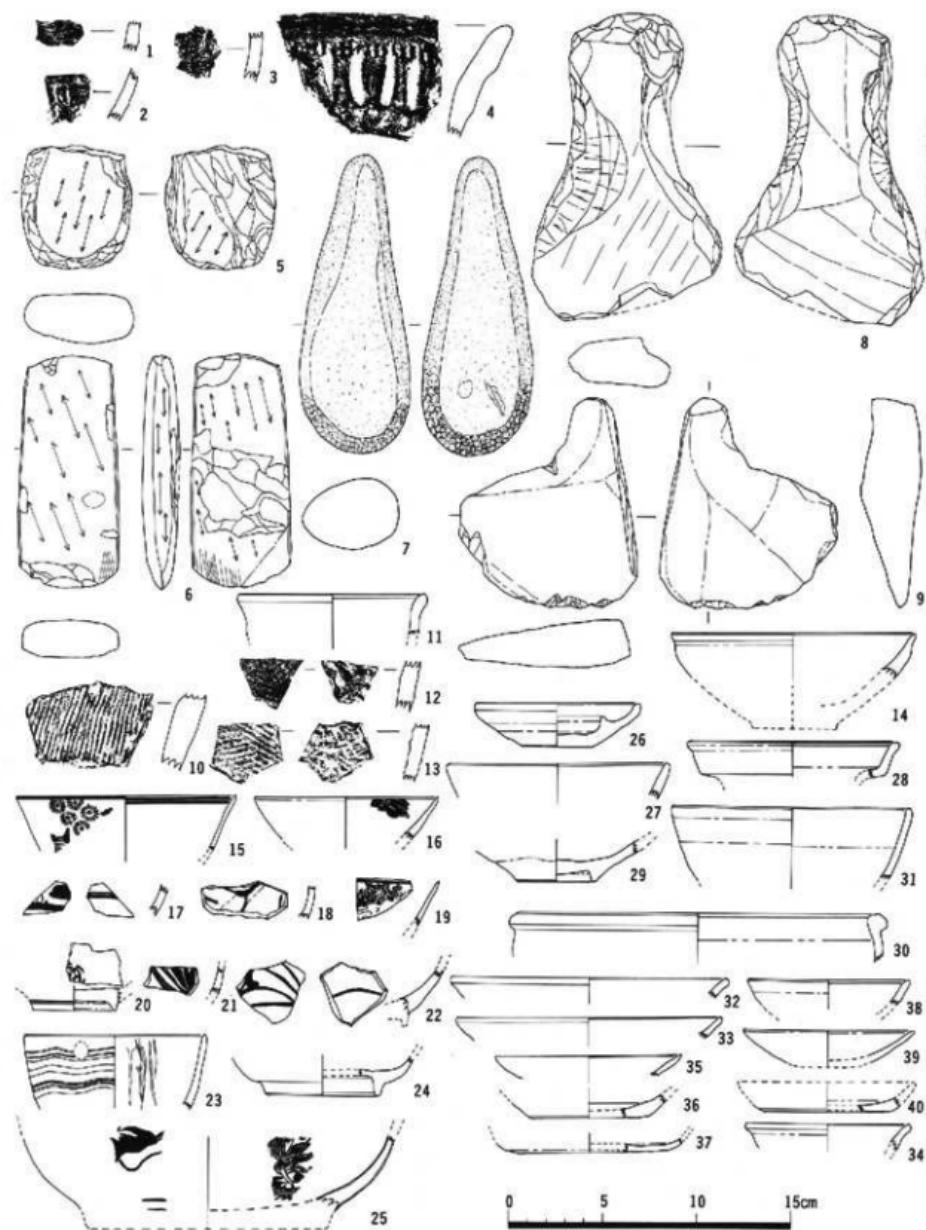


(1981年撮影 緯尺1/20,000)



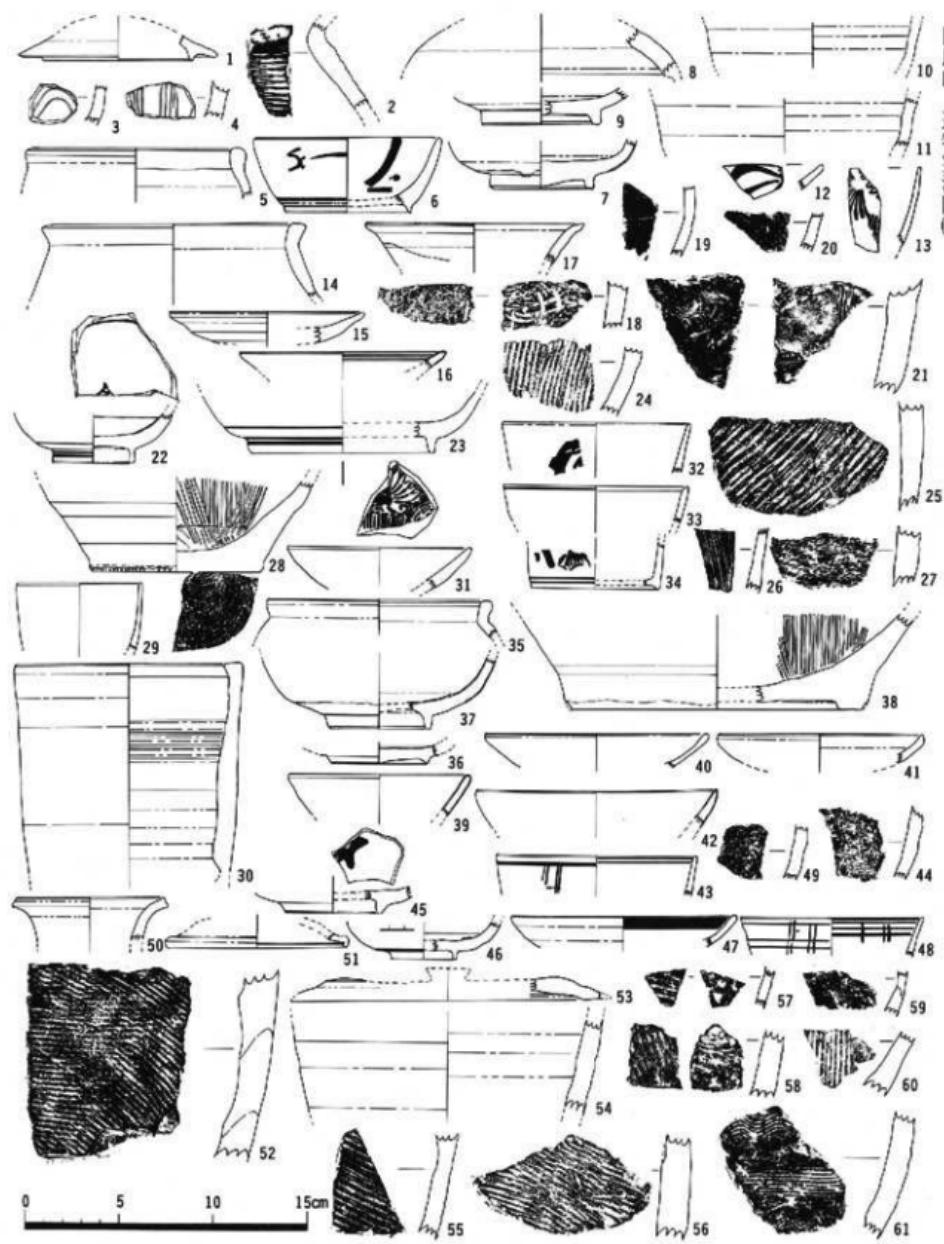
縄文土器・石器, 須恵器, 土師器, 陶磁器

(1~38: 広野新遺跡, 39~41・45~46・48: 広野B遺跡, 42~44・47: 広野A遺跡, 57~58・62~65: 郷津沢館, 49~52: 1~2区
50~51・53: 1~3区, 54~55・69~71・72~76: 1~6区, 56~59~61~64~68~78~79: 1~7区, 70~73~80~85: 1~5区, 74~75
~77: 1~1, 比尺1/3, 図版10参照)



縄文土器・石器・須恵器・土師器・陶磁器

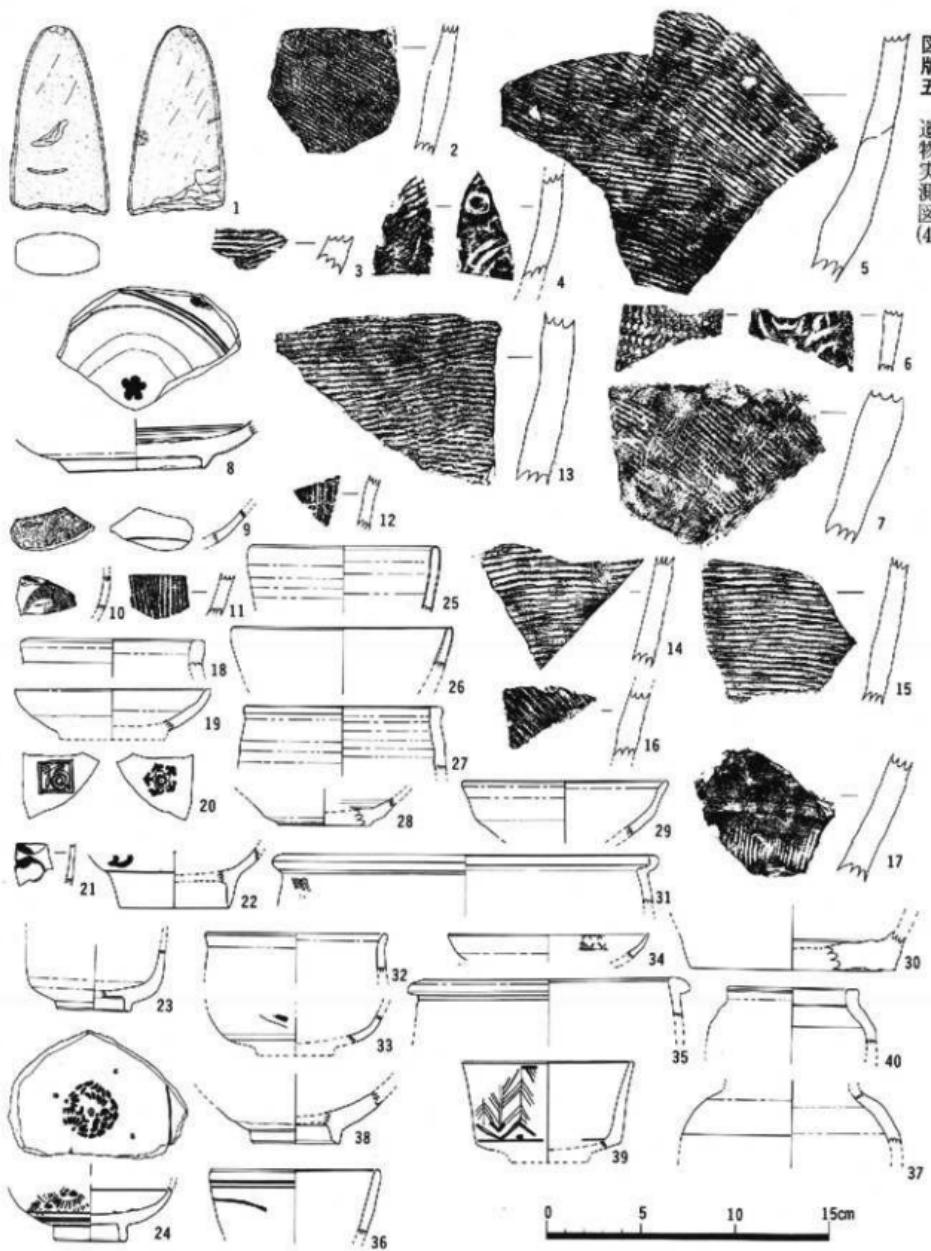
(1～6：柿沢新遺跡、7～9：田島野遺跡、32～40：郷柿沢鉱跡、10～31：イ-3、縮尺1/3、図版11参照)



土器器、須恵器、珠洲、陶磁器

(8~13: 比柿沢館跡, 1~7・14~23・39~41: イ-8区, 24~38: イ-5区, 42~54・57~60: ロ-1区, 55・56・61: ロ-2区 30: 縮尺1/4, 他: 縮尺1/3, 図版12参照)

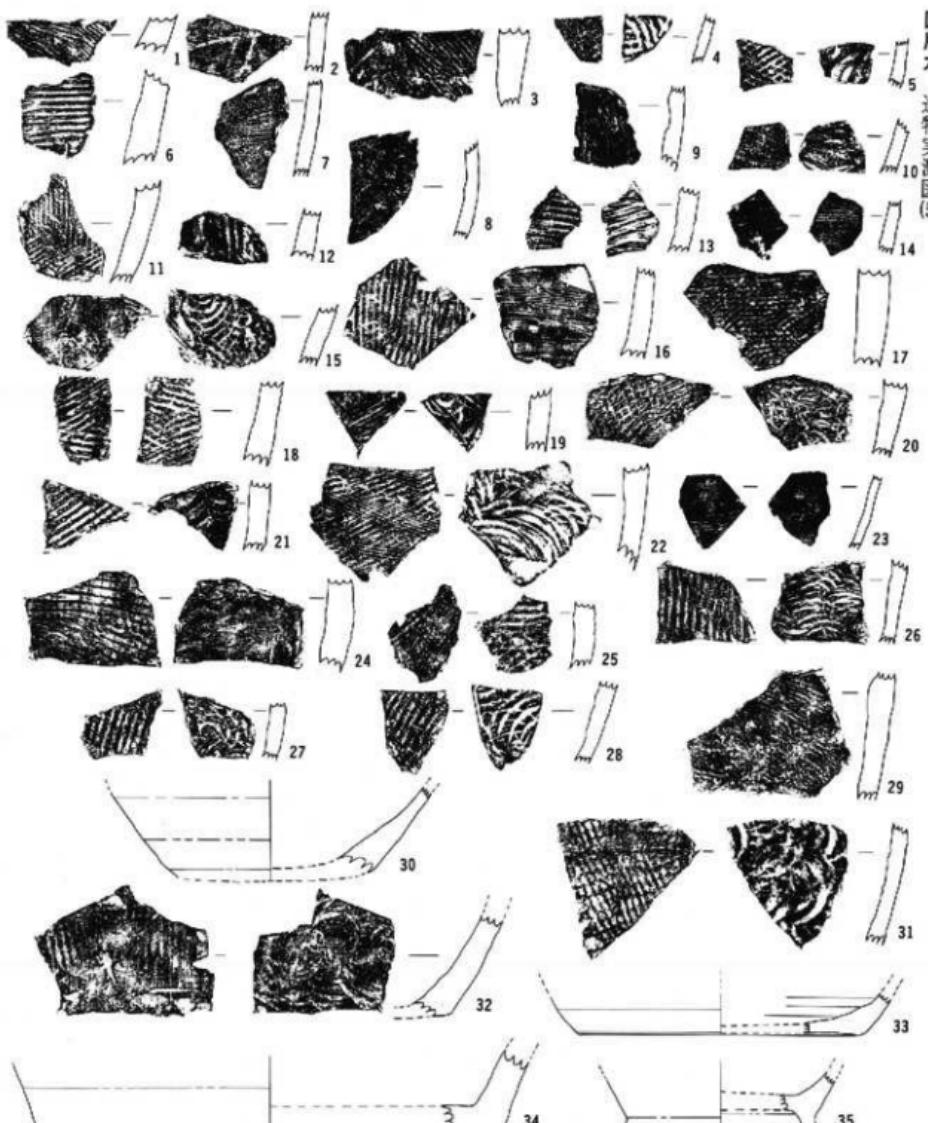
図版五
遺物実測図(4)



網文石器、須恵器、珠洲、陶磁器

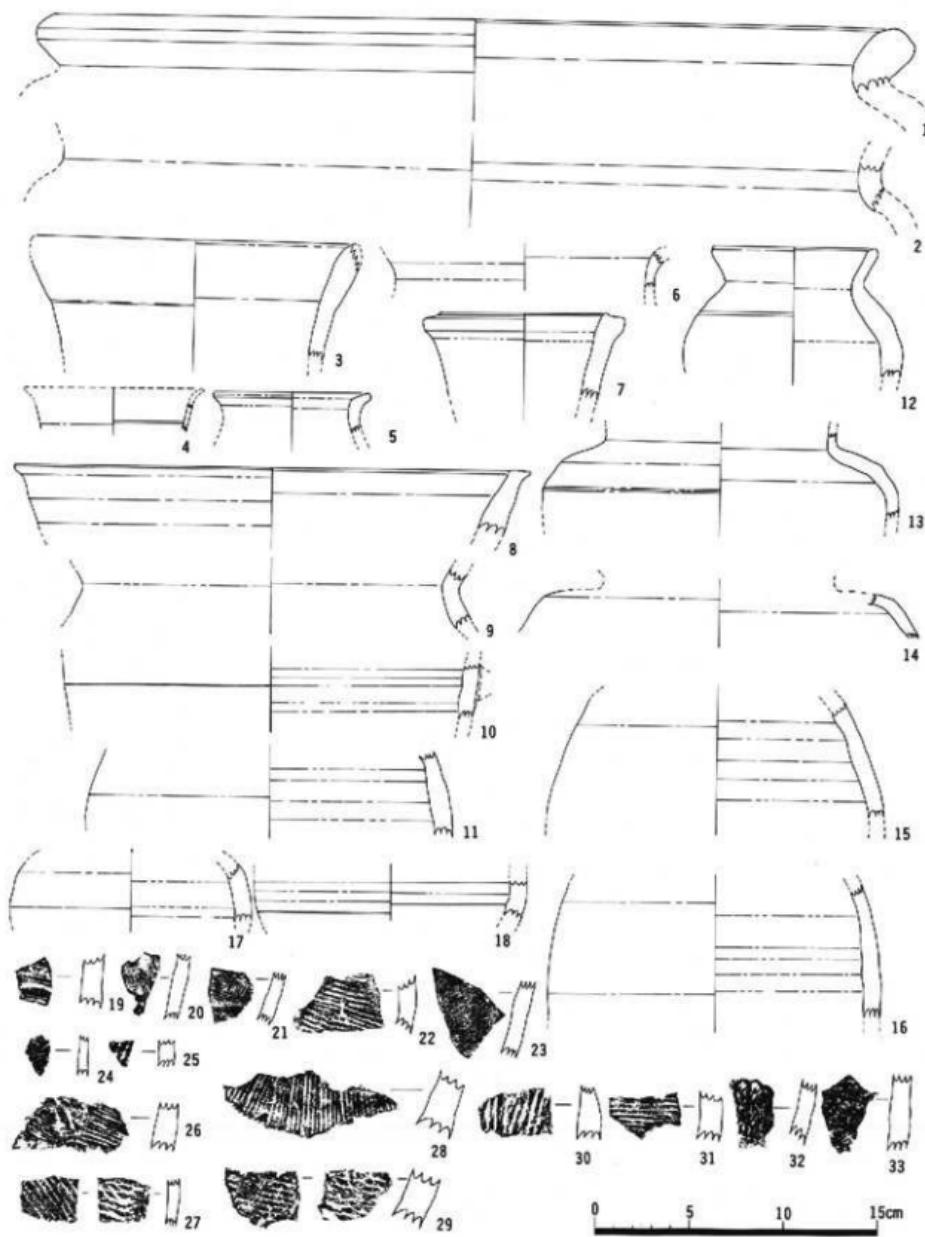
(1:三杉遺跡、2~37:イ-4区、38~40:イ-7区、縮尺1/3、図版13参照)

図版六 遺物実測図(5)



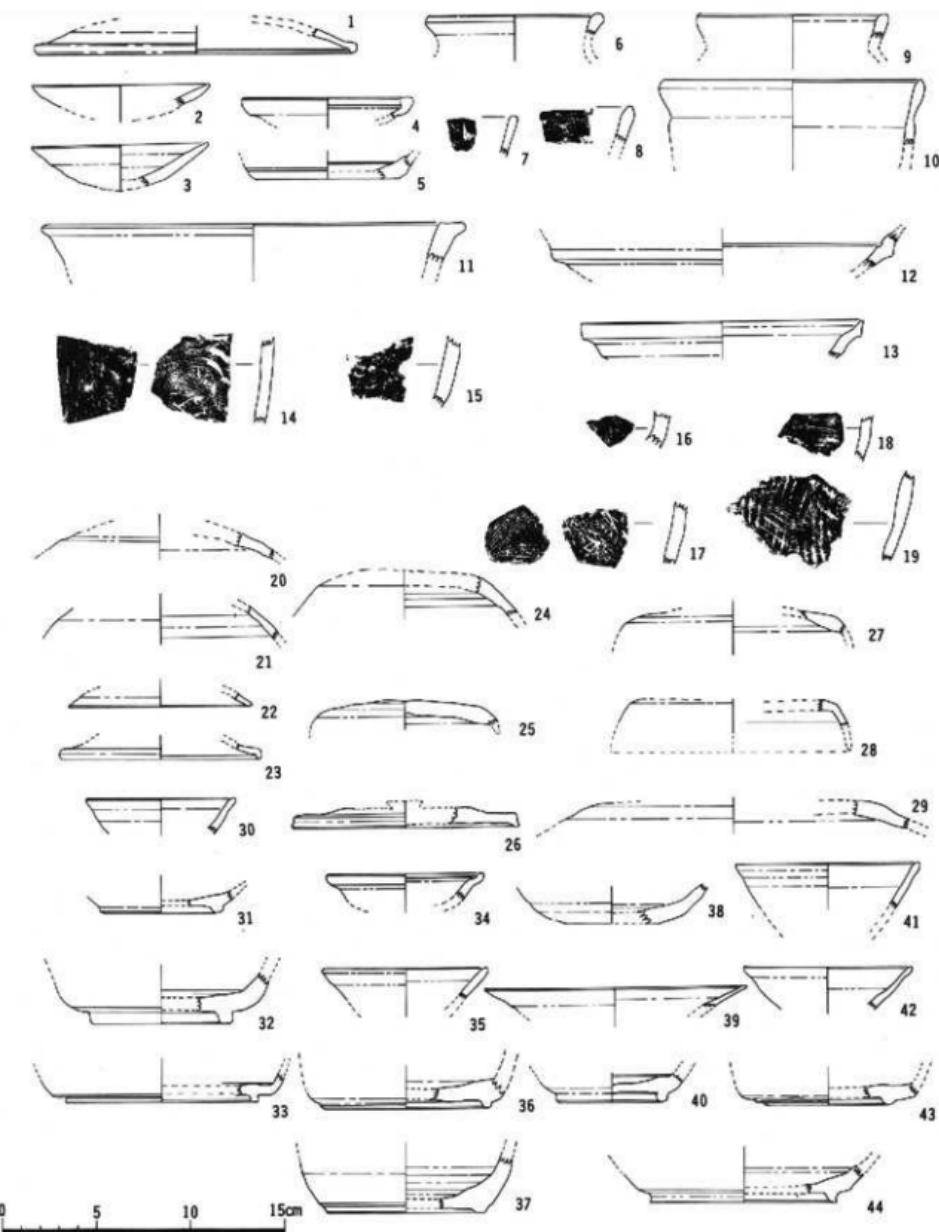
須恵器

(1~35: 桑田大門添遺跡、縮尺1/3、図版14参照)



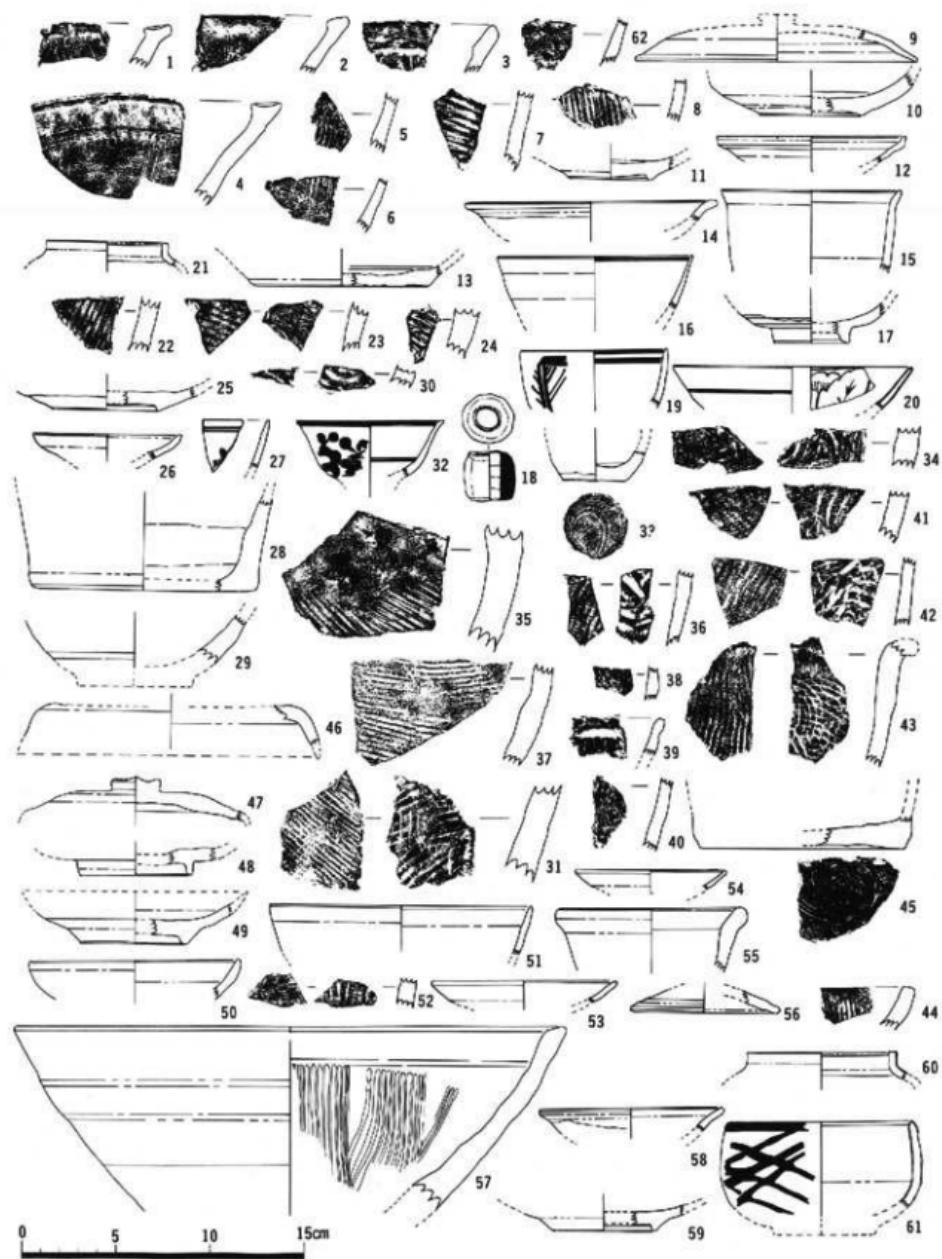
須恵器

1~33: 桑田大門派遺跡, 縮尺1/3, 図版15参照)



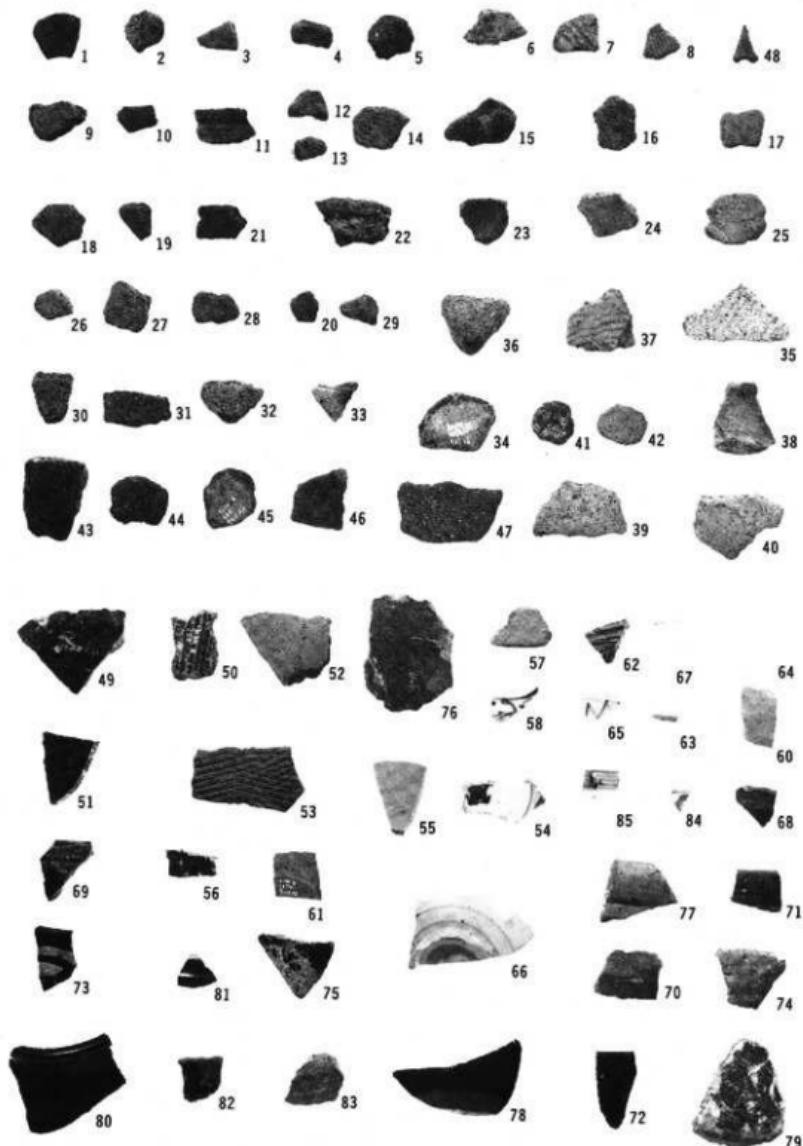
土器類、須恵器

(1~44: 伊丹大門派遺跡、縮尺1/3、図版15参照)

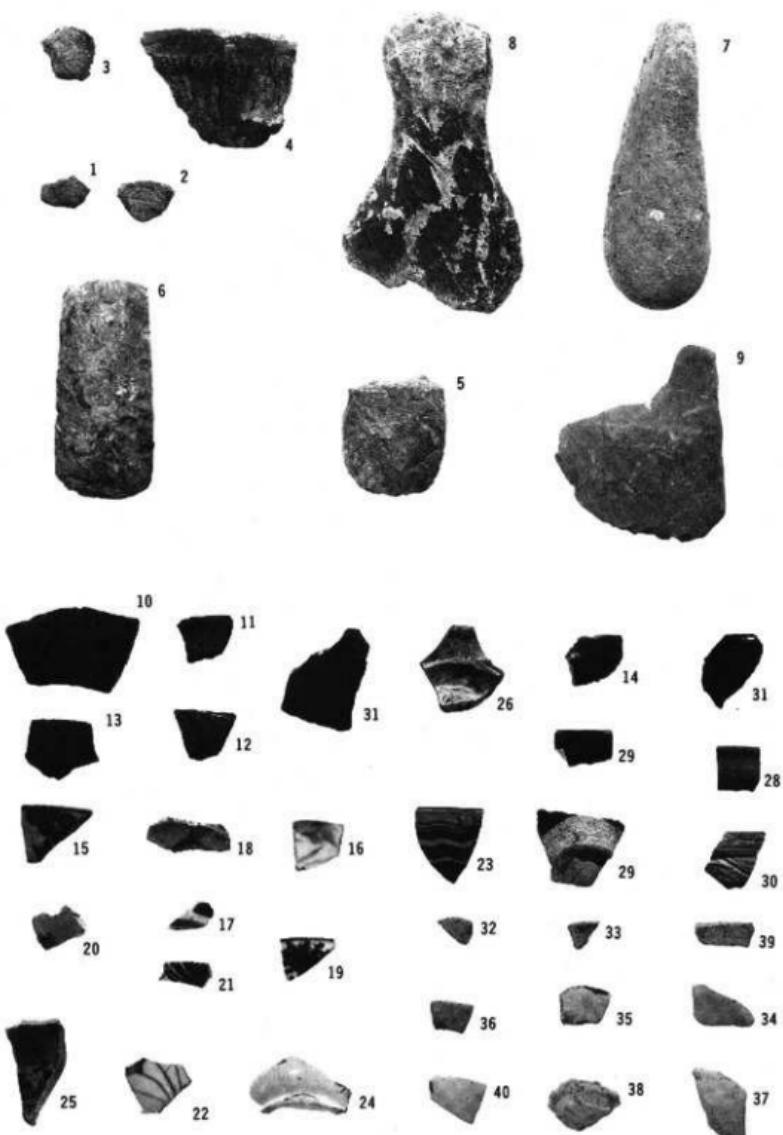


縄文土器、土師器、須恵器

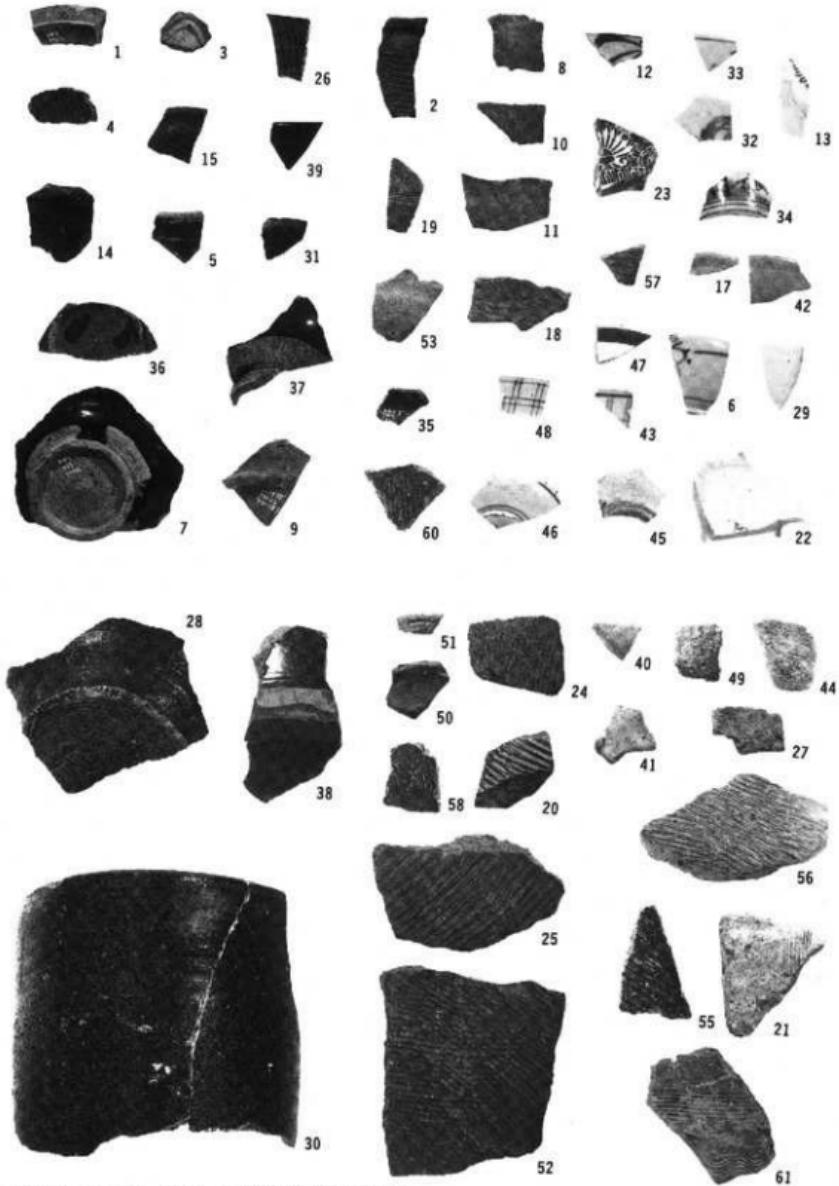
(1~20:稗田大門添遺跡, 21~57・59~61:稗田善界遺跡, 58:口-4区, 縮尺1/3, 図版16参照)



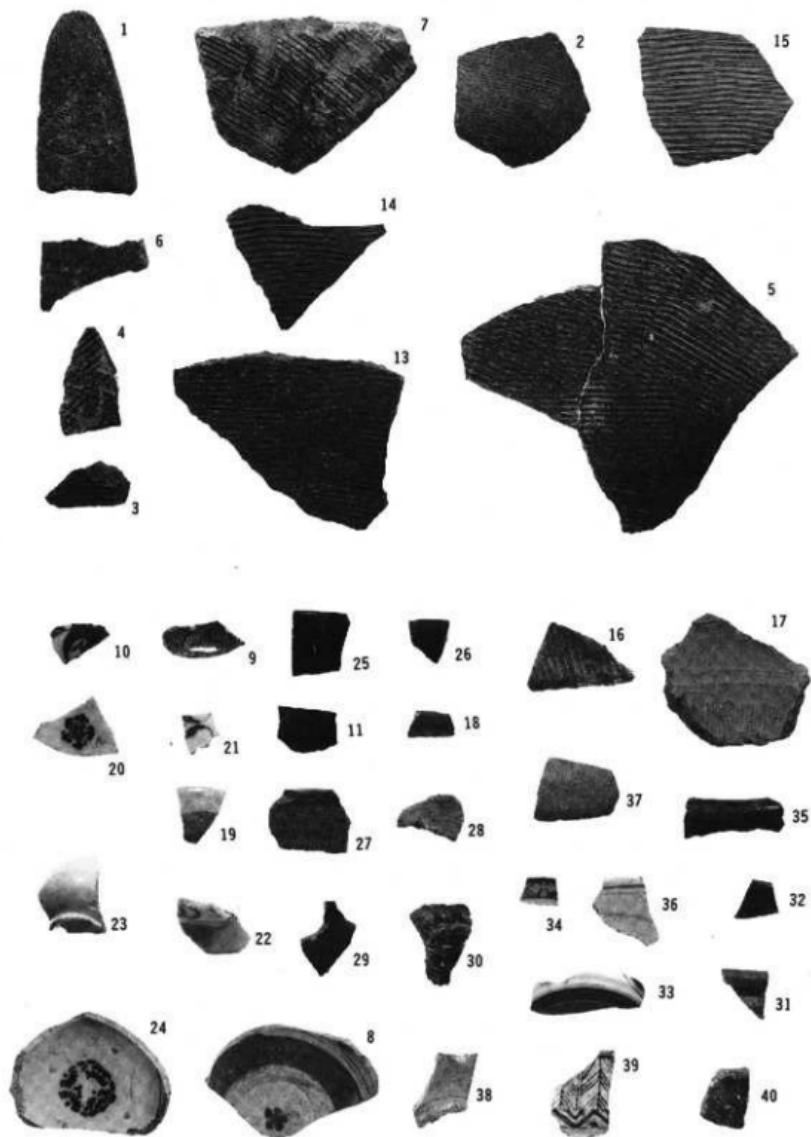
縄文土器・石器、須恵器、土師器、陶磁器（図版二参照）



撲文土器・石器、須恵器、土師器、陶磁器（図版三参照）

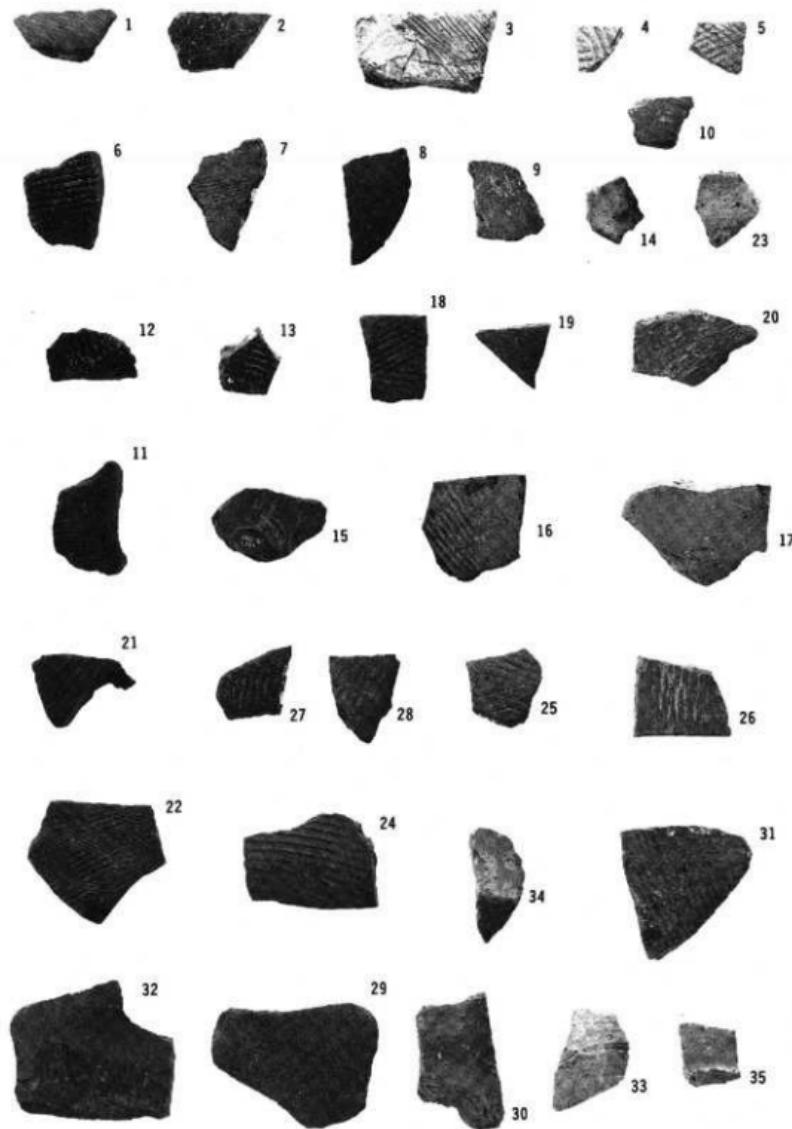


土師器、須恵器、珠洲、陶磁器（図版四参照）



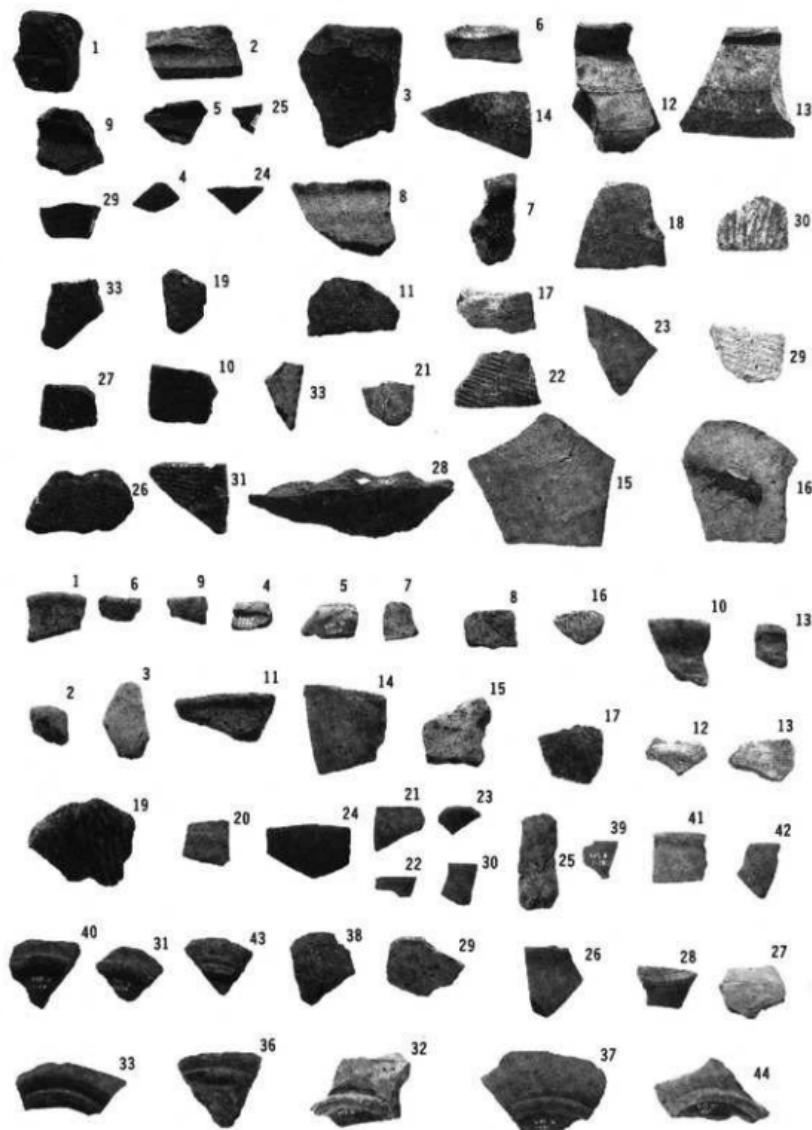
縄文石器、須恵器、株洲、陶磁器 (図版五参照)

図版一四 遺物写真(5)

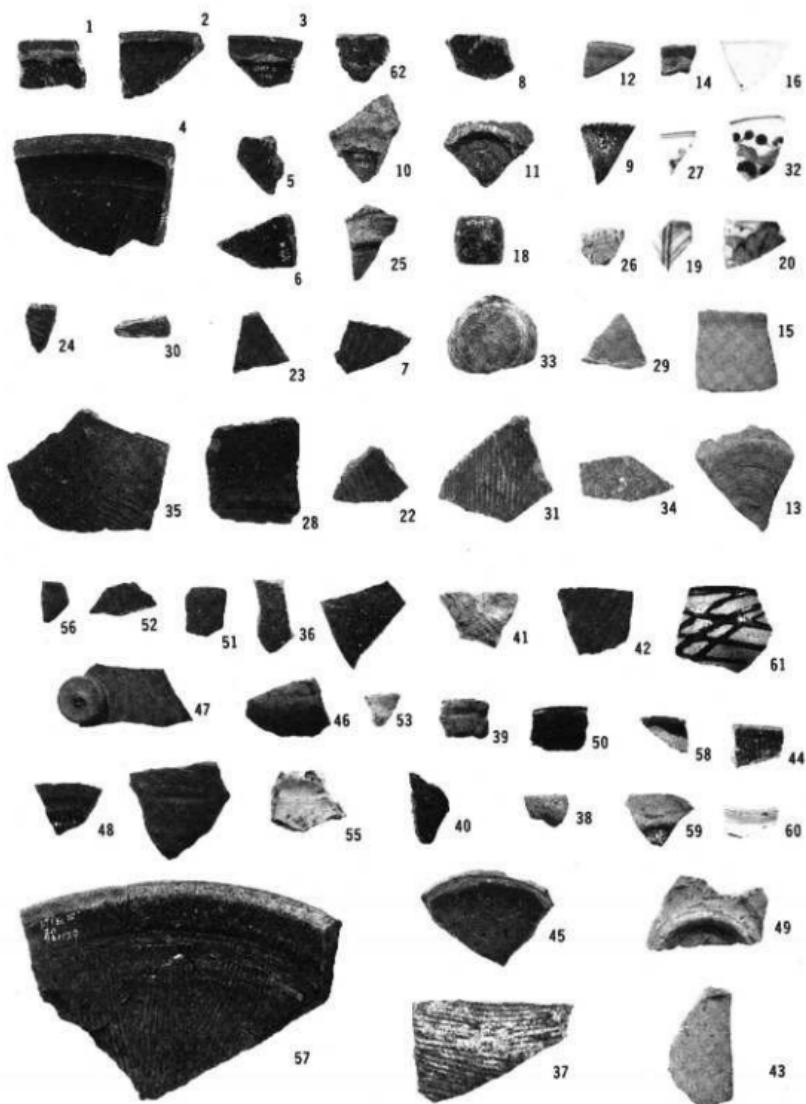


須恵器 (図版六参照)

図版一五 遺物写真(6)(7)

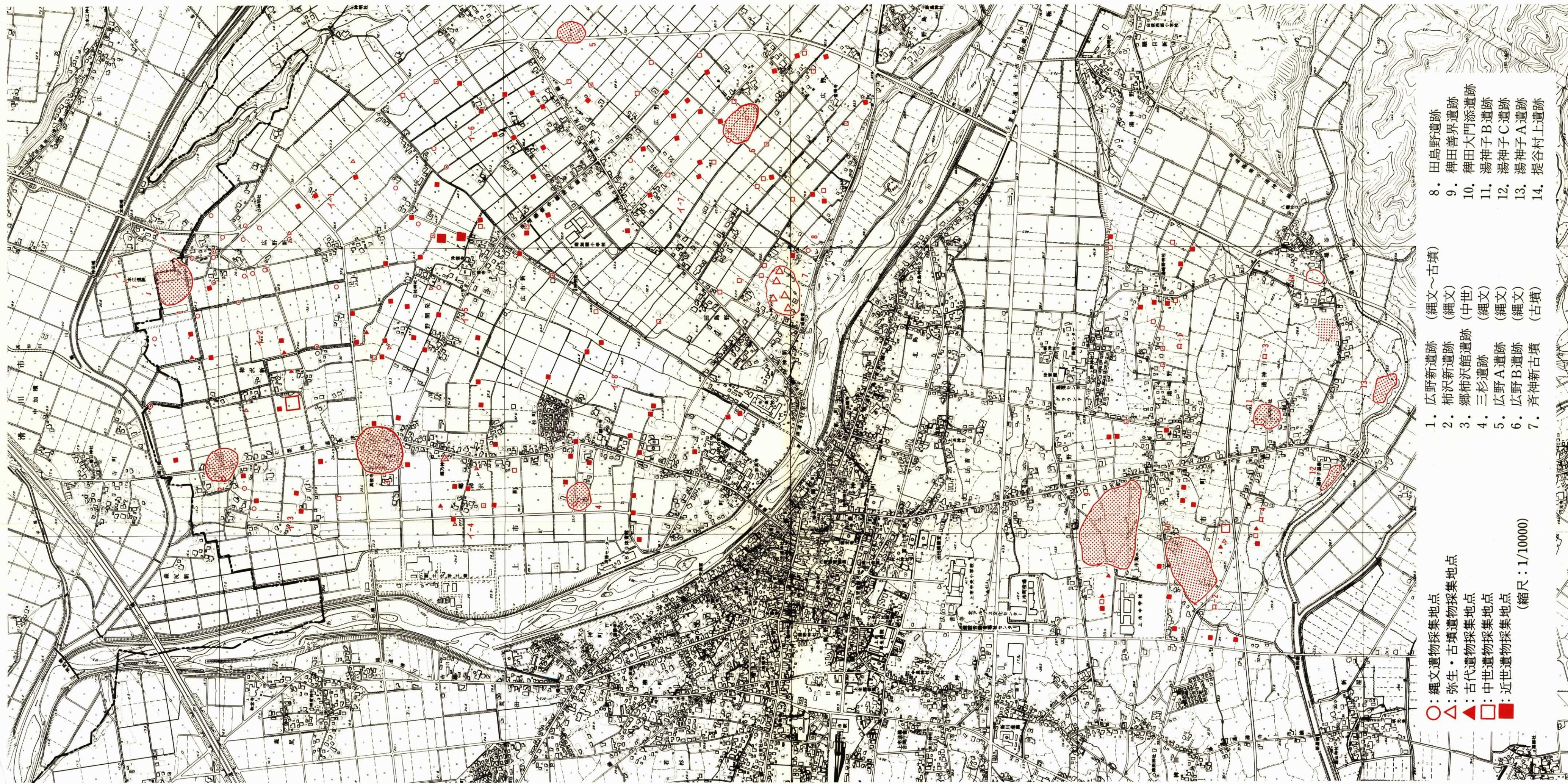


須恵器 (図版七・八参照)



縄文土器、土師器、須恵器（図版九参照）

図版一七 遺跡分布図



1991年3月25日 印刷
1991年3月31日 発行

上市町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

編集 上市町教育委員会
発行 上市町教育委員会
印刷 チュエック

